九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

# Queensland University of Technology (QUT) 研修報告

星子, 奈美 九州大学附属図書館コンテンツ整備課電子化係

https://doi.org/10.15017/8089

出版情報:九州大学附属図書館研究開発室年報. 2006/2007, pp. 36-42, 2007-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室

ボージョン: 権利関係:

### 報告

#### Queensland University of Technology (QUT) 研修報告

星子 奈美\*

#### 〈概 要〉

2006年8月31日から2007年2月28日までの6か月間にわたる実務研修で学んだ、Queensland University of Technology (QUT) における図書館業務の内容および、図書館運営における特徴について述べる。

## Study Visit to Queensland University of Technology (QUT) HOSHIKO Nami\*

#### 1. はじめに

2006年8月31日から2007年2月28日までの 6か月間にわたり、私は、九州大学が国立情報 学研究所より委託された、平成18年度次世代学 術コンテンツ基盤共同整備事業の一環として、 Queensland University of Technology (QUT)での実 務研修に派遣された。研修の主目的は、QUTに おける機関リポジトリ業務の先進的な取り組み を、実際に業務に携わりながら学ぶことであっ たが、機関リポジトリのノウハウだけでなく、 図書館運営全般について日本との違いを知る、 貴重な機会を得ることができた。

今回の報告では、QUT図書館における業務内 容や、図書館職員の日常について印象に残った 点を概略的に述べたい。

#### 2. QUTについて

QUTは、クィーンズランド州の州都ブリスベンにある総合大学である。複数の前身校が統合して現在の大学組織となっており、キャンパスの中には、Old Government Houseのように歴史を感じさせる建築物があるが、QUTとしての創設は1989年と、比較的新しい大学である[1]。



写真 1 1860年代に創立されたOld Government House

大学名には"Technology"という単語が含まれているが、理工系だけでなく、ビジネス、芸術、人文系の学部も持っている。学生数は約4万人、そのうち12%が海外からの留学生とのことで、キャンパスを歩いているといろいろな国の学生に出会った。地理的に近いため、アジアからの留学生も多いようである。キャンパスは、Gardens Point、Kelvin Grove、Carseldine、Cabooltureの4か所に分かれており、Gardens Point、Kelvin Groveはブリスベンの中心部に近く、Carseldine、Cabooltureは郊外に位置する。



写真2 Gardens Point Campus 玄関



写真3 木々に囲まれたCarseldine Campusの図書館

私は、Gardens PointとKelvin Groveの2つのキャンパスで勤務していた。両キャンパスの間には15分間隔(学生の休暇中は30分間隔)でスクールバスが運行され、10分程度で他方のキャンパスへ到着することができるため、授業や会議のためにキャンパス間を行き来している学生や教職員が多かった。

#### 3. 図書館組織

QUTの図書館は、大学全体の組織構成としては、"The Division of Technology, Information and Learning Support"に属する。図書館員の数は、約170名である。

図書館は、各キャンパスに一つずつ設置されており、それとは別にLaw Libraryもある。各図書館には、それぞれの研究分野に関する専門知識を持った図書館員がリエゾンライブラリアンとして配置され、研究者と図書館をつなぐ役割を

果たしている。一方、受入目録担当部署のLibrary Resource Services とシステム担当部署のLibrary Systemsは、すべての図書館におけるそれぞれの業務を集中的に担当している。また、館長やその秘書、広報等を担当する職員はLibrary Secretariat に所属している。九州大学附属図書館の「中央図書館と分館」という構成とやや異なり、Library Resource ServicesとLibrary SystemsはKelvin Grove に、Library SecretariatはGardens Pointにあり、2つの図書館の両方が中枢的な機能を果たしている。両キャンパスは規模が同程度で地理的にも近いため、このような組織形態になっているのであろう。

#### 4. 各部署の業務について

QUTにおいて、私は基本的に、機関リポジトリへのデータ入力作業を行う受入目録担当の部署に在籍していたのだが、機関リポジトリや電子的資料に関連するその他の部署でも、短期的に仕事をしたり、見学したりする機会に恵まれた。ここでは、私が視察することのできたいくつかの部署について、業務内容と、特徴的な取り組みについて述べる。

#### a) LRS

図書・雑誌受入目録を担当する部署である。 私の主要担当業務であった機関リポジトリデー タ入力は、目録担当スタッフがおこなっていた ため、私はこのオフィスで過ごす時間が最も多 かった。スタッフ数は約30名で、全学分の図 書・雑誌の受入目録を担当している。

受入を担当しているのは、各図書館に配架される資料で、年間受入冊数は約3万冊程度である。図書館に配分される学内共通経費としての資料費は、各部局の学生数や書籍の必要度に応じて分野別に予算が定められている。リエゾンライブラリアンが主に選書を担当し、購入した資料は図書館内に配架される。各部局・教員の予算による研究室配架用の資料購入を受け付けるシステムもあるが、これは例外的なケースで、このプロセスで購入された図書は蔵書冊数・受入冊数として計上されていない。大学の予算で購入した資料は、大学の構成員が平等に利用できるよう、図書館に配架されるのが原則である

ので、特定の研究者が資料を独占的に使用する ことは望ましくないという話を伺った。

LRSが担当している業務では、下記のような 点が特徴的であった。

#### ○図書受入のオンライン化

QUTでは図書の80%を、Blackwellと、オーストラリアの出版社James Bennettの選書システムを使ってオンライン発注している。発注後、それぞれの出版社から受注番号が付番されたデータが返ってくるので、LRSの担当者は、図書館システムにデータを取り込む(Blackwellの受注データにはMARCレコードもついている)。納品時には請求書データが付いてきて、再度そのデータを図書館システムに取り込んで支払処理をする。1冊ずつ手入力する必要がほとんどないため、支払までのプロセスが省力化されている。

#### OCourse Material Database (CMD) [2]

各教員が授業で用いる参考文献を格納しているデータベースで、QUTの構成員であれば必要な文献を自由にダウンロードすることができる。CMDでは、学術雑誌の1論文、もしくは書籍の10%分など、オーストラリアの著作権法で認められている範囲内でフルテキストのデータが公開されており、LRSではCMDに登録する文献のスキャンや、メタデータの入力を担当し、年間4~6千件のデータを新規入力する。(更に、CMD内の複数文献をオンライン上で選択して申し込むと、印刷体として届けてくれる、Flexiprint [3] という有料のプリントサービスもあり、これについては別の部署が担当している。)

#### b) Library Systems

図書館内のシステム管理を担当する部署である。スタッフ数は12名だが、うち図書館員は3名で、それ以外のスタッフはプログラミングやWEBデザイニングを専門とするエンジニアである。Library Systemsは、図書館内で用いているシステムのリニューアルや保守に関連して、下記のような業務をおこなっている。

#### ○ホームページ管理

QUTは大学全体としてWEBページのデザインポリシーを持っており、図書館ホームペー

ジもこのデザインポリシーを踏襲してつくられている。図書館では、サイトの編集にMacromedia Contributeというソフトウェアを使用することが定められている。これにより、HTML形式の文書を編集するのではなく、通常の文書を書くのと同じ感覚でホームページを作成できるというメリットがある。Library Systemsには、Web Development Coordinatorという役職のホームページ管理者がいて、個々の図書館職員によって編集されたホームページの内容は、この管理者の承認手続きを経て一般に公開される。

#### ○図書館職員用イントラネットの整備

QUTでは、図書館職員用のイントラネットを構築している。ここには、業務マニュアル、統計、名簿など図書館に関する資料がまとめて保存されていて、私のように新しい職員が図書館の業務を把握する際に大変便利であった。クリスマスの時期には、クリスマス用のデザインに切り替えられたり、職員の間でおこなわれるイベントのお知らせや報告のために活用されたりするなど、職員のコミュニティサイトとしての役割も果たしているように思われた。

#### ○WEBユーザビリティーテスト

WEBサイトのリデザインを検討する際、図書館利用者の声を反映させるため、ユーザビリティーテストをおこなっている。テストの被験者は、図書館ホームページのお知らせで募集をするが、謝礼としてデパートの商品券や音楽ギフト券を贈呈するため、希望者は多いようだ。被験者は、学部生、院生、教員のバランスを考えて選出されているようであった。

テストには、Camtasia Studioというソフトを用いている。このソフトを用いることによって、カメラで撮影している被験者の様子と、その被験者が開いているWEB画面、被験者がマウスで指し示している部分を録画することができる。このユーザビリティーテストの結果をもとに、ホームページ内の文言や、アイコンの配置を修正している。

Library Systemsには、WEBインタフェース

の向上を担当する専任スタッフがいるので、 新しいWEBサイトを立ち上げる際には、たく さんのカードをテーブルに並べてサイト構造 を検証するなど、綿密な計画の下にホームペー ジが運営されている。



写真4 ユーザビリティーテスト用のパソコンと WEBカメラ



写真5 ホームページのレイアウトを検討するため、 机一面に並べられたカード

#### c) Reference

各キャンパスの図書館に配属されているレファレンスライブラリアンを合計すると、20名強(パートタイム職員を含む)のスタッフがレファレンス業務に従事している。これとは別に、リエゾンライブラリアンのポストに就いている

スタッフも居るので、利用者のサポート体制が 非常に充実していることが分かる。

私は、留学生用の講習会の様子を一度だけ覗か せていただく機会を得た。OUTには留学生が多い のだが、この留学生たちのオリエンテーションの 一部として、リテラシー講習会が組み込まれて いた。1グループ20名ほどの留学生が担当教員 と共に図書館へやってきて、複数回にわたる講 習を受けるプログラムとなっていた。私が見学 をした際は、ProOuest等、ベンダーのデータベー スを用いて文献を検索するための講習で、留学 生対象の講習としては、進行のペースが少々速 いように感じられたのだが、実際のところ、学 生たちは特に問題なくデータベースを使いこな しているようであった。講習では、自分が研究 している課題に関する文献を検索するための時 間が十分に与えられていて、学生の自主性が重 んじられていた。講習が終わるとレファレンス ライブラリアンによる会議が開かれ、講習での 反省点を踏まえ、資料を修正するなどのフィー ドバック作業もおこなわれていた。

#### 5. 職場環境

QUT図書館の業務内容から学んだ点はもちろんたくさんあったが、「日常と違う環境、しかも違う国で働く」という経験そのものによって、新鮮な驚きを覚える場面も多々あった。以下に具体的な例を挙げたい。

#### a) 雇用と待遇

QUTの職員は公募によって採用されている。 公募情報は、QUTのホームページ上に掲載され ている [4]。オーストラリア国内あるいはQUT の職員のみを対象とする募集もあるが、図書館 の館長職などの場合は、海外からの候補者を募 集することもある。私がQUTに派遣されたのは 前任の館長が退職されるのと同時期だったた め、数ヶ月間は臨時のポストで図書館が運営さ れ、その間に館長の公募と選出がおこなわれた。 職員の採用に関して、年齢制限はない。オース トラリアでは、年齢による採用の制限は差別と 見なされるという。

日本の場合、定期的な学内異動があるが、 QUTの場合、違う業務への異動を希望するので あれば、そのポストの公募が出た際に申し込む 必要がある。ポストに空きがでるのがいつにな るか分からないし、必ずしも採用されるという 保証がないため、希望通りの職務に就くのはな かなか難しいようだ。また、それぞれのポスト はレベル1から10までの格付けがあり、それに よって給与や業務内容が定められている。自動 的に昇進するケースはまれで、現在のレベルか らのキャリアアップを希望する場合も、新たな ポストに申し込まなければならない。そのため、 自分が希望するポストを求めて、他大学の図書 館職員の求人に申し込むことも珍しくなく、職 員の入れ替わりも頻繁にある。職員用のイント ラネットに、業務マニュアルが揃っているのは、 そのような事情が関係しているのかもしれな 11

更に、それぞれの職員は、毎年自分が達成する べき課題についてレポートを作成し、最終的にそ の課題を達成できたか、上司との面談によって査 定される。

#### b)フレックスタイム制度

QUTでは、4週間で145時間の労働が定められており、この枠内で自分の勤務時間を自主管理することができる。一日あたりの労働時間に換算すると7時間15分であるが、少し多めに働いた分、別の日に早く帰るという調整も可能だ。周りの人達を見てみると、早朝7時半くらいから働き始めて、昼の3時過ぎには帰るというパターンが多いように思われた。これは、夕食を家族揃って食べるオーストラリアの習慣に関係しているのだろう。

#### c)モーニングティー

毎朝10時頃には、お茶のために休憩を取っていいことになっており、スタッフは自分で持ってきたモーニングティーのためのおやつを休憩室で食べたり、学内のカフェへ出かけたりする。この休憩時間は、勤務時間の中に含まれている。通常の業務中だけでなく、会議やイベントの最中であっても、会場の片隅にはお茶の準備が整えられ、時間になるとモーニングティーが始まる。仕事の息抜きとしてだけでなく、職員同士のコミュニケーションを円滑にするという重要な役割を果たしている様子が伺えた。

#### d) 職員向けセミナー

QUTでは、多様なジャンルの職員向けセミナーが開催されている。単に「興味のある話を聴く機会」という意味合いだけでなく、担当業務に関係のあるセミナーへの出席は、自らの業績を示す証拠として重要な意義を持っている。また、図書館の場合、ホームページの編集をする職員は、すべて先述のMacromedia Contributeについての講習会を受けるよう定められており、セミナーを受けることが業務を担当する条件となっている場合もある。

セミナーの内容は、著作権やパソコン操作など実際の職務と直接関係するテーマだけでなく、職場環境保全に関するものもある。例えば、「Back Care and Manual Handling」という講習会では、パソコンを使う業務をする際に、背中に負担をかけないような姿勢や、椅子の選び方、筋肉をほぐすストレッチなどの指導があった。私が所属していた部署では、実際にこうしたセミナーの内容を実践しており、職員みんなで体操をする時間が設けられていた。

#### e) パーティー

私が滞在していた期間にクリスマスが訪れた こともあり、職場では多くのパーティーが開催 された。年末には、大学職員すべてを対象にし た大きなパーティーがキャンパスの中庭で開催 されたし、図書館職員のボウリング大会や、クリ スマスの朝のバーベキューパーティーなど、さま ざまな催しがあった。また、私が所属していた LRSのオフィスでは、モーニングティーの時間に 毎月の誕生パーティーも開かれていたし、私の 歓迎会や送別会も開いていただいた。こうした パーティーは昼間の勤務時間内におこなわれた。 これは、職員がコミュニケーションを深めたり、 リラックスした雰囲気を楽しんだりといったこ とが、職場環境を良い状態に保つことにつなが り、大学の運営上のメリットになると考えられ ているからであろう。



写真6 ボウリング大会では、スタッフ全員が南太平洋風 のコスチュームをまとっていた

#### 6. まとめ

QUTの図書館で私が体験したことを総括する と、下記のような点が特徴的であると感じた。

#### a)効率性

職員用のイントラネットでマニュアルや統計を管理することで、業務の引き継ぎが円滑になったり、必要な資料をすぐに閲覧することができたりと、分からないことを誰かに尋ねる手間が省力化されている。また、システム担当部署ではエンジニアが多く雇用されていたり、専門分野の知識を持ったスタッフがリエゾンライブラリアンとして配置される、というように、適材適所の人員配置によって、個々の職員が得意な分野で能力を発揮できる体制がある。更に、資料受入にオンライン選書を導入するなど、新しいシステムを用いた業務の合理化にも積極的である。

#### b) 計画性

図書館運営においては、計画を立てることと、その計画の達成度を評価することが徹底されていた。図書館では、年度ごとのStrategic Planが策定されるのだが、このPlanを大きな紙に印刷したポスターが図書館職員すべてに配布されており、オフィスの壁に貼るなどしてPlanを意識している職員が多かった。一方、計画の評価に関しては、資料費の消化度などの具体的な数値が定期的にメールで通知されたり、年度末に全職員でのミーティングを開催し、一年間の総括や、新しい年度の目標の確認が実践されたりしていた。また、職員個人レベルでも、課題の設定と、

達成度の評価がおこなわれていた。

#### c)快適性

フレックスタイム制度が導入されていることは、職員それぞれの生活にあった働き方を可能にする。また、職場でパーティーが開かれたり、モーニングティーの習慣があったりすることは、仕事の中に楽しみの要素を加えることにより、働くモチベーションを維持するのに役立っていると思われる。また、職場環境保全のセミナーがおこなわれていることからも、職場の快適さが重要視されていることが分かる。更に、図書館職員に女性が占める割合が高く、管理職に就いている職員のほとんどが女性であることからは、女性が継続的に働き、キャリアアップできる可能性を持った職場であることが分かる。

職員が無理せず働き続けることのできる環境は、先述の業務の効率性や計画性によって実現されているのと同時に、個々人の生活を重視するオーストラリアの人々の気質に拠るところも大きいのではないか。



写真7 クリスマスの飾り付けが施された図書館内

今回オーストラリアの大学図書館で働く機会を得たことによって、同じ業務に対するオーストラリアと日本でのアプローチ方法の違いを実感として学ぶことができた。オーストラリアと日本では、会計法規的な違いや、根付いている思想の違いがあり、オーストラリアでのやり方を単純に真似できるわけでもないし、全てを真似する必要もないであろう。しかし、今後日本で業務に携わる中で、自分の仕事を違った視点

から俯瞰することができるようになったのではないかと思う。

#### 斜辞

今回の研修にあたり、温かく迎えていただいたQUT図書館のスタッフの皆様に感謝します。また、貴重な機会を与えてくださった九州大学附属図書館の有川節夫館長、濵﨑修一部長、長期の研修にこころよく送り出していただいた、コンテンツ整備課の鈴木課長、電子情報係の渡邊由紀子係長をはじめ、九州大学附属図書館のスタッフの皆様にも、心よりお礼申し上げます。

#### 参考文献

- [1] Queensland University of Technology. The University:
  - http://www.qut.edu.au/about/university/
- [2] Queensland University of Technology. Course Materials Database (CMD):
  - http://www.library.qut.edu.au/cmd/
- [3] Queensland University of Technology. Student Copying and Printing Services: http://about.flexiprint.qut.edu.au/
- [4] Queensland University of Technology. Real Career Opportunities at QUT:
  - http://www.hrd.qut.edu.au/recruitment/forapplicant/careersatqut/index.jsp